

巻頭言

補習校教育への熱いところ・・・

生野 康一

全国海外子女教育国際理解教育研究協議会事務局長

台風の接近で関空からのフライトを心配しながらバスに乗る。NWAのカウンターに行くとデトロイト行きは「トウモロウ」 8月22日早朝デトロイトへ向けて出発。

全国海外子女教育国際理解教育研究協議会（全海研）が補習校プロジェクトを立ち上げて初めて海外の補習校訪問研修を企画実施した。デトロイトでの東西の集合が始めから狂ったけれど、22日（水）デトロイト補習校を皮切りに、トレド、コロンバス、バッファロー、ボストン、ニュージャージー各補習校とニューヨーク日本人学校を訪問することができた。総勢11名、全海研の幹事を中心に補習校教育に関心のある東西の教師が集まった。

文部科学省の派遣教員のいる学校、いない学校と両方を訪問することができたのも大変有意義だった。訪開校で迎えてくださった先生方、スタッフの方々、運営委員さん、PTAの方々とも熱い話し合いが持たれた。海外へ出る子どもたちで、補習校で学ぶ子どもと日本人学校で学ぶ子どもの数が殆ど変わらないのに、国内での補習校教育への関心は低調だった。数年前からスタートした全海研の補習校プロジェクトは、補習校ネットの充実を中心に、カリキュラムの作成、講師研修への支援等少しずつ活動を広げてきている。その活動の中から生まれた顔と顔を突き合わせた研修の第1回目である。そして、現地の補習校関係者のニーズに我々がどれだけ答えることができるかという初めての試みである。

8月30日、帰国したばかりで全てのまとめはこれからだが、どこの補習校でも抱えている課題をここでは紹介したい。

児童生徒の学習歴の違いからおきる授業成立の困難性が講師の先生方を悩ませている。3年から5年の派遣期間で来る子どもたち、しかも転入の時期は1年中4子どもたちの滞米期間はバラバラである。その上、長期滞在、永住組の子どもたちが加わると、教室の中は大変である。いかようにも作り変えられるカリキュラムも必要になってくる。先生方の研修にも力を入れている事を伺った。また、小さな補習校では研修もままならないというお話もあった。熱心な講師の先生方の研修への、全海研の協力のあり方を考えさせられた。

日本語の定着をより確実にするため幼稚園部の開設が考えられている補習校も増えてきつつある。企業の派遣も若い人が増え、幼児の数が増えつつある中で、入学以前の日本語習得への関心も高まっているようであった。幼稚園の先生、カリキュラム、日本語教材の収集と大変な日々を送っておられる様子を伺い、地元の日本人の方全てがボランティアで活躍されているとお聞きし、頭の下がる思いで拝聴した。

派遣教員のいない小さな補習校の運営委員長さんが、試行錯誤しながら総合科の学習作りを切々と語られるのを聞き、教育の原点に触れさせていただいたような気がした。小さな補習校にもコアになってくれる教育経験者が欲しいという願いや、どんなに頑張ってもいつもこれでいいのだろうかという自問自答の日々だというお話を聞いて、我々を含めて日本の教師が学ばなければならないことを教えられた。どんなに小さな補習校でも、こんな素晴らしい方々に囲まれている子どもたちは、しあわせだなと感じさせられた。

帰国時の子どもたちに少しでも力になればという願いが、今日も明日も続いている補習校の現状を生まで見せていただき大きな感動を受けて団員全員がファイトをもらって帰国した。関西から旅立った4名は30日関空で荷物を受け取ることができなかった。荷物はどこへ行ったのだろう。台風も荷物の紛失も吹き消すような大きなインパクトが補習校にはあるようである。日本から支援する我々の活動は、益々熱を帯びてきざるを得なくなる。